

## 「フロアホッケーを活用したクラスの絆づくりプロジェクト」事業

### 誰もが楽しめるユニバーサルスポーツを通して 学校や地域社会の絆の再生を図る

学校におけるいじめや学級崩壊の問題があとを絶たない。文部科学省は2013年の取り組み方針の中で、地域社会との連携、心身の健康と社会性を育む安全なスポーツの重要性を唱えているが、政府のこうした方針を待つまでもなく、日本フロアホッケー連盟ではスポーツを通して学校や地域の絆づくりを推進する活動を続けてきた。

#### 年齢・性別・障がいの有無を超えて交流する 大会や体験会を開催

フロアホッケーは、スペシャルオリンピックス(SO)の種目として知的障がい者のために開発された競技だが、2005年に長野県で開催されたSO冬季世界大会の会長を務めた細川佳代子さんは、このスポーツの持つ力に着目。「ルールが簡単で、年齢や性別、障がいの有無を超えてみんなが参加して楽しめるチームスポーツは、フロアホッケーにおいてほかにはない」と日本フロアホッケー連盟を設立し、誰もが楽しめるユニバーサルスポーツとして日

本での普及に努めてきた。これは世界でも初めての試みである。

この競技の特徴は、技能レベルに応じてチームがクラス分けされるため、運動が苦手な人でも安心して参加できること。さらに、ゲームでは3分ごとに選手を交代させるルールを設け、体力面などで有利な人だけが活躍することなく、皆が平等に力を発揮できるよう考案されている点にある。強いチームをつくって勝つことが目的ではなく、助け合いで楽しく試合をするスポーツである。

日本フロアホッケー連盟は、リーダーが旗を振り、その旗の下に志ある者がボランティアで参加するという、これまでのスポーツの競技連盟とは全く異なる形で活動してきた。活動は全国に広がり、現在は山形県、長野県、熊本県に支部を置き、小中学校を中心に、大学や地域団体、特別支援学級、知的障がい者施設に指導者の派遣や用具の貸し出しを行い、大会や体験会を開催している。

2013年度全国大会には小学生からシニアまで23チーム、345人が参加したほか、地域のブロック大会、小学生



第3回関東甲信越大会で熱戦を繰り広げる小学生チーム



AJOSCマークの入ったゼッケンを付けて、細川さんもチームをつかって大会に参加

体育館に貼られたAJOSCのポスター

を対象にしたジュニア交流戦などが行われている。

今年度は、第3回関東甲信越大会(6月8日、長野市真島総合スポーツアリーナ)、初開催となる東京地区交流大会(10月27日、東京都日野市実践女子大学・短期大学)のほか、小学校、大学、知的障がい者福祉センターで行われた11の体験会、レフェリーや指導者の派遣や講習会にAJOSCの助成が役立てられた。

「あらゆる差異を超えた混成チームをつくって交流を図ることが活動の目的です。多様な交流を通して、誰もが能力や可能性を等しく秘めて生まれてきたということを実感することで、優しさや思いやりが生まれます。知り合う機会がないから偏見を持ち、いじめや差別が生まれるのです。ですから、ぜひ子どもたちにこそ、フロアホッケーを通してお互いを理解し絆を深める体験をして欲しいです」と、細川さんは活動の主旨を語る。

#### クラスにおけるフロアホッケーの取り組みで 生徒たちの意識に変化

主に小中学校で開催している体験会や講習会に参加した子どもたち、教職員、PTAからは、「簡単で楽しい」、「運動は苦手だが、スポーツを楽しむきっかけになった」、「チームプレーで助け合いの心を養うにはもってこい」、「知的障がいのある方たちと一緒に汗をかくだけで意味のある交流ができると感じた」、「体育の授業に取り入れて欲しい」といった感想が寄せられている。

さらに、こうした体験会などをきっかけにして、学級活動にフロアホッケーを取り入れている学校もある。

「男女が対立してバラバラだった小学6年生のクラス

#### 担当者より



社会に向けて  
全国の地道な活動の  
PRを期待したい

NPO法人日本フロアホッケー連盟  
理事長  
細川佳代子さん

私たちは、さまざまなハンディキャップを超えて触れ合い、理解し合うインクルージョン社会の実現を目指して活動しています。同じように地道な社会貢献活動をしている団体は全国にたくさんあります。AJOSCには、これからもそういう活動に目を向けてどんどんPRして社会に紹介していただきたいと思っています。

では、男女混成チームをつくって練習を重ね大会に出場するうちに、いつしかお互いを尊重し合い男女仲よく話をするようになり、クラスがまとまっていったそうです。また、ゆとりの時間を使って知的障がい者とフロアホッケーで交流を図った中学校のクラスでは、いじめがなくなり、生徒がみんないきいきとして学力も上がったという、モデルケースもあります。このような取り組みが全国の学校でできたらすばらしいと思います」と細川さん。しかも、多くの子どもたちが、卒業文集などで一番の思い出としてフロアホッケーのことを挙げていているという。

ネット社会となり生徒間の絆が希薄になっているといわれる学校教育現場において、今一番に求められているのは共同体験を通してお互いを尊重し合うことなのかもしれない。学校での取り組みはまだ長野県内に限られているが、フロアホッケーによるクラスの絆づくりは確実に成果を上げている。



延べ450人が参加した第1回東京地区交流大会